

-7-

津 守 眞

Morris Minnesota 〇 日

二月十九日から一日一晩ひどい吹雪が降り続いた。ミネソタの主要な道路もすっかり雪で切断され、交通遮絶の状態だった。私は二月廿二日の日曜日に Morris というミネアポリスから百五十哩許、人口四千ばかりの小さな町の教会の高等学校の生徒に話をす事になっていたので、少からず気をもんでいたが廿一日にはすっかり良い天気になつてバスも動き始め、開通最初のバスで Morris を訪ずれる事が出来た。雪におゝわれたミネソタの平原は壮観である。雪が波となって湖も、河も、平野もまったく雪の大洋となつてしまふ。どこまで行つても雪の海である。それが或る所は、太陽に

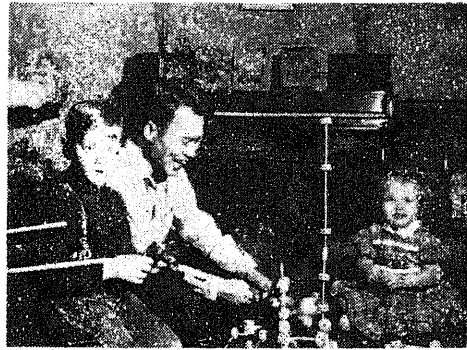
反射して鏡のようにきら／＼と光り、夕陽の沈む時には、雪が蒼赤に映える、そしてその雪の大洋の中に所々にかたまつて村がある。モリスはその中では大きい町の一つである。ミネアポリスでは随分小学校や高等学校の生徒と接する機会があつたが、こゝういふ小さな町で話をする機会があつたのは始めてなので、久々で年をとつた次第である。

このモリスは一八七〇年頃、ニューイングランドからの移民によつて作られ一九世紀の終り頃からスカンディネヴィア系の移民が大量に入つてきて、殆んどが農業と小さな商業に従事している。そして殆んどの人々が黒人も、黄色人種も未だ嘗つて見たことのないというようなところであり、

日本人に合うのは始めてだというような人ばかりだった。 Mr. Hansen と云うプロテスタント合同教会の牧師さんの家に一晚泊してもらい、月曜一日、小学校の子供達高等学校の生徒達を相手に過した。

さて、こゝに来て話をして、大きな市の子供達と違ふところは、私の語ることが非常に素直に受け入れられたということである。都会の子供達は刺戟が多いので、余程刺戟のある話をしないと、まとまりがつかないのに、こゝの子供達は実に素直に受けてくれるのでそれが嬉しかった。

私はこの頃、いつも話をする時には、人種問題をもつてくることにしている。アメリカという国は、実に人種問題の複雑なところである。ニグロ・インディアン・アジア人・ユダヤ人・南米人・等々。これらは所謂、マイリテイと呼ばれ、社会に受け容れられず、偏見をもつて見られる種族である。けれどもそういう皮膚の色、髪の色で、人間を特別視し、白眼視するのが誤りであることは明瞭なことである。相互の偏見を取除き、お互に人間を尊重し合はなければ、いくら平等と唱えても無意味であ



子供達とうち興ずる津守先生（在米中）

る。又違った文化同志、お互に尊重し合はなければ、いかにインターナショナルリズムを唱えても無意味である。又お互に自分のものを犠牲にする覚悟がなければ、いかに平和を唱えても空念仏である。そして又、いかに混頓の世界にも、個人同志の親しい交りは、国境も人種もこえて心を温め合ひそれが平和の基礎である。

小さな町の子供達は、実際に違った国の人達に接することもなく、その限られた小

さな経験の範囲の中だけで生活しているけれども心の温かい素直な子供達である。

Mr. Hansen の家には Sharon という小学校六年生のかわい、女の子と、Butsch と呼ばれる二年生の男の子と、それに三ヶ月の赤ん坊という。赤ん坊の世話はシャロンのつとめである。シャロンは赤ん坊が好きで、夜も赤ん坊のベットの自分の寢室に寝かしておく。アメリカ人には珍しい子供である。ブツチュはいつも自分の寝るベットと自分の寢室を私に提供したというのが大得意である。

日曜日には、ひまな時間をみつけてシャロンとブツチュとかわるがわる自分達の宝物をみせてくれる。野球の選手の写真、飛行機の写真、レコードをお腹の中に備えつけた物と云うお人形、自分が作ったという卵の殻に絵の具をぬった小さな人形、等々果しがない。

昼食を小さなレストランで父親と私とこの二人の子供と一緒にとったのも珍らしかった。普通、日曜の昼食はサンデーディナーと云って、家庭でありたけの御馳走をするのが習しであるのに、レストランで質素

な食事を楽しく食べた。何組かの家族連が同じようにハンバーグやホットドッグなどをレストランで食べていた。

夕食を終えて、夜のバスで私がミネアポリスに帰る時になると、ブツチュが泣き出して止まない。私と別れるのが悲しいのだという。シャロンは自分と赤ん坊を日本まで連れてゆけという。一騒動の挙句、バスの停留場まで送ってきてくれて別れた。私も亦、ミネアポリスから一五〇哩もある此の小さな町に、再び来られないだらうと思ふと、感慨を禁じ得ない。

そこで考えるのは、私達どんな戦争の最中でも、世界中に到る処に、こういう親しみ合うことの出来る個人がいるのだということである。たとえ政策がどうであろうと、個人同志の友情には国境もなければ人種もない。

唯、一日一緒に遊んだというだけで、別れるのが悲しいと云って泣いてくれる子供達、私はそういう子供達が世界のあらゆる処に沢山いることを信じていたい。

（お茶の水女子大学教授）